

2022（令和3）年度共同研究集会  
「官民オープンデータ利活用の動向及び人材育成の取組」

# 日本人の余暇時間

－「社会生活基本調査」1996年／2006年／2016年から－

平井 太規  
立教大学コミュニティ福祉学部

2022/11/24

# 本研究の目的

## (1) 余暇時間の通史的な変化を捉える

余暇時間は1996年～2016年の20年間でどのように変化してきたのか？

→ジェンダー別に把握する

→類型（休息型余暇時間、趣味的余暇時間、交遊型余暇時間）別に把握する

## (2) 余暇時間と階層との関連性を捉える

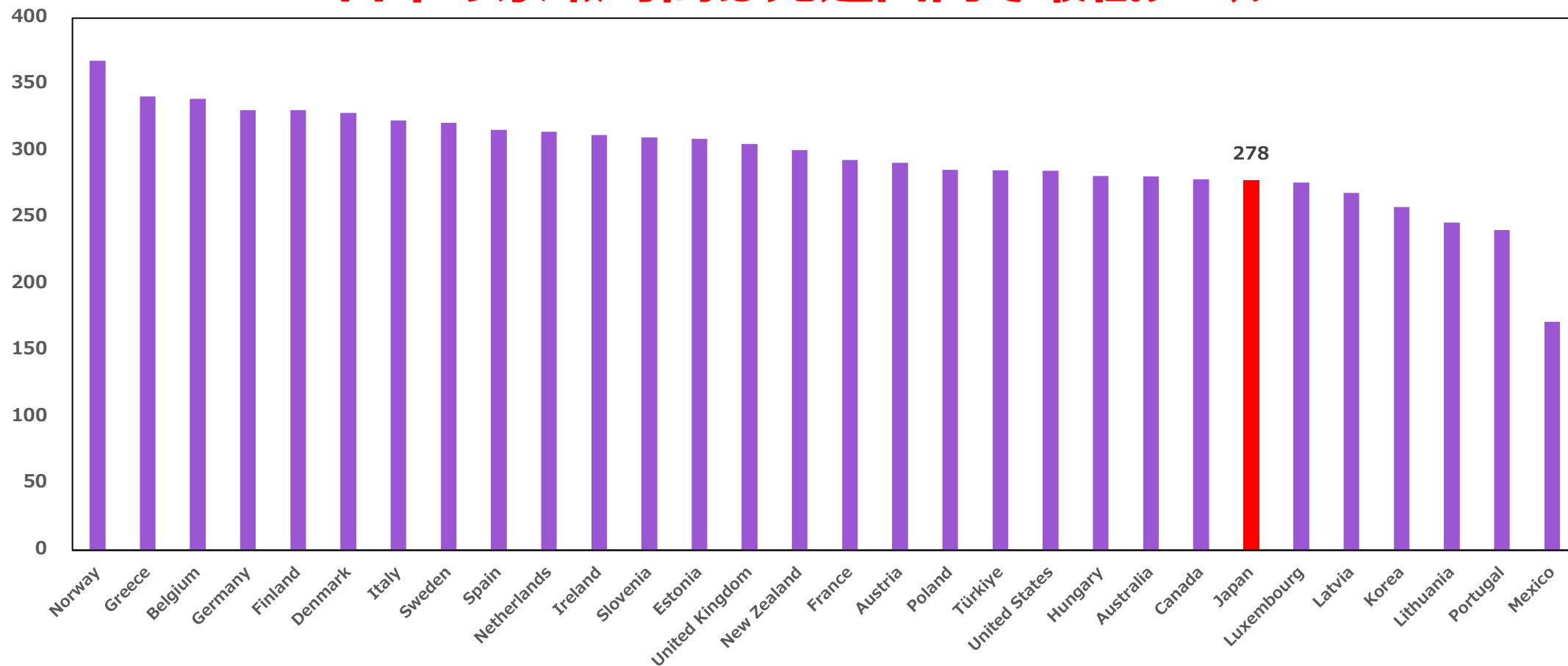
余暇時間の長短に階層（学歴、職業）はどのように寄与しているのか？

→ジェンダー別に把握する

→類型（休息型余暇時間、趣味的余暇時間、交遊型余暇時間）別に把握する

# 社会的背景（1）余暇時間の国際比較

日本の余暇時間は先進国内で最低レベル



資料 : OECD, "Time Use", Socia Protection and Well-being (<https://stats.oecd.org/Index.aspx?datasetcode=HSL>)

注) 対象者は15-64歳の男女、余暇はTime spent socialising; attending cultural, entertainment and sports events; in hobbies, games and other pastime activities; participating in sports and outdoor activities; using mass media; performing other leisure activitiesと定義されている。

## 社会的背景（2）余暇時間は減少傾向？

黒田（2012）

### 1976年から2006年までの30年間の余暇時間の推移

男性

週あたりの余暇時間は有意に減少  
（平日と日曜日も有意に減少）

女性

週あたりの余暇時間はやや増（統計的に有意ではない）  
（平日は有意に減少）

\*余暇時間は、（「睡眠」「身の回りの用事」「食事」「学業」「買い物」「移動（通勤・通学を除く）」「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」「休養・くつろぎ」「学習・研究（学業以外）」「趣味・娯楽」「スポーツ」「社会的活動」「交際・付き合い」「受診・療養」「その他」）の総計と定義されている

## 社会的背景 (3) 余暇時間は社会生活に重要

### 余暇時間 Leisure Time, Free Time

⇒24時間の中で個人が自由に使えると想定される時間 (石田 2019)

⇒第3次活動時間

余暇時間が不足すると、本来確保されるべき時間的ゆとりが喪失され、時間貧困 (Vickery 1977・水野谷 2020) になるリスクも上昇する。時間貧困は多くの家族・個人にとってライフコース上のウェルビーイングに多大な影響を及ぼす (Kalenkoski and Karmrick 2013)。

時間は人々によって大変貴重な資源であり、余暇をはじめとした一定程度の時間的なゆとりを確保することは日常生活において必要なことである。とりわけ、「豊かなライフスタイルを築くためには平日の余暇時間が重要である」(佐藤 2009)。

# 余暇時間の規定要因に関する先行研究①

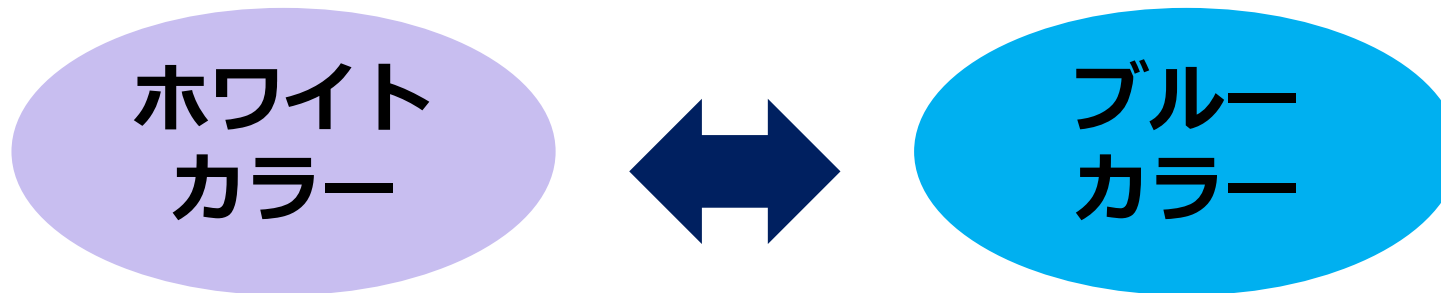
学歴や職業など階層的要因が与える影響については知見がはっきりしていない

ジェンダー	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 男性の方が余暇時間が長い (Bittman and Wajcman 2000 ; Mattingly and Bianchi 2003)</li></ul>
労働時間	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 自身の労働時間が長くなるほど余暇時間が短い (水落 2010)</li></ul>
学歴	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 高学歴ほど余暇時間が短い (Robinson and Godbey 1999)</li><li>・ 学歴は余暇時間に影響しない (Jarozz 2016)</li></ul>
職業・職種	<ul style="list-style-type: none"><li>・ ホワイトカラーよりもブルーカラーの方が短い (Jarosz 2016)</li><li>・ 職業や職種による違いはない (Katz-Gerro and Sullivan 2010)</li></ul>
子どもの有無	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 子どもがいることで余暇時間は短くなる、特に女性においてその傾向は顕著 (Mattingly and Bianchi 2003)</li></ul>

# 余暇時間の規定要因に関する先行研究②

石田・佐藤（2016）

職種によって余暇時間はどう異なるか？



趣味や交際に関する余暇時間が長い

テレビやくつろぎなどの休息に関する余暇時間が長い

職種という階層的要因によって余暇時間の細部に異なる傾向がみられる

→上記の傾向は平日のみならず、土日にも同様にみられる

→ジェンダー問わず似た構図だけ、男性の方がより顕著

# 分析枠組み：余暇時間の定義

Aguiar and Hurst (2007) では①睡眠、②食事、③身の回りの用事、④テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、⑤休養・くつろぎ、⑥趣味・娯楽、⑦スポーツ、⑧社会参加活動、⑨交際の合計としている。また、水落 (2010) では①テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、②休養・くつろぎ、③学習・研究 [学業以外]、④趣味・娯楽、⑤スポーツ、⑥社会参加活動の合計を余暇時間と定義している。これらを参考に以下の通り定義する。

<b>休息型余暇時間</b>	テレビ・ラジオ・新聞・雑誌、休養・くつろぎ
<b>趣味型余暇時間</b>	趣味・娯楽、スポーツ、社会参加活動
<b>交遊型余暇時間</b>	交際
<b>余暇時間合計</b>	上記の合計



# 分析枠組み：使用するデータ

## 「社会生活基本調査」匿名データ：1996/2006/2006年

\* 2001年調査よりA票・B票、2種類の調査票が導入されている。本研究ではA票のデータを使用。

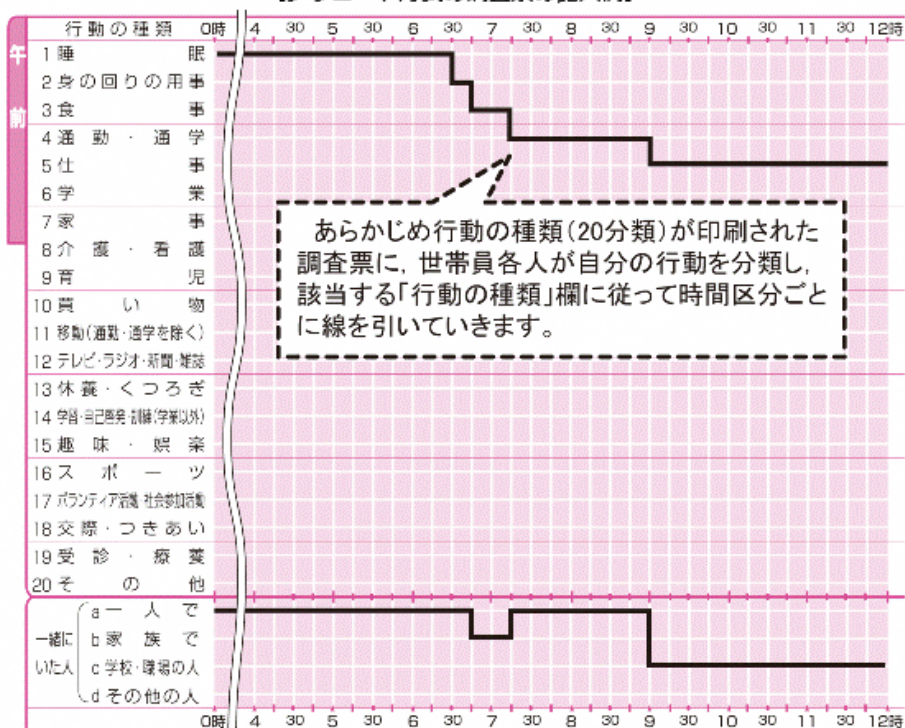
調査目的	<ul style="list-style-type: none"><li>・国民の生活時間の配分および自由時間における活動を調査する</li><li>・国民の社会生活の実態を明らかにする</li></ul>
調査時期	<ul style="list-style-type: none"><li>・10月上旬～中旬のある期間のうち連続する2日間</li></ul>
調査対象	<ul style="list-style-type: none"><li>・指定された調査区内に居住する世帯から選定された、約4000世帯内にふだん住んでいる10歳以上の男女</li></ul>
抽出方法	<ul style="list-style-type: none"><li>・1次抽出：都道府県ごとに人口に基づく確率比例抽出により抽出</li><li>・2次抽出：等確率無作為抽出により、各調査区から10世帯前後を抽出</li></ul>

\* 政府統計匿名データは「行政機関等が行う統計調査によって集められた調査票情報を、特定の個人又は法人その他の団体の識別（他の情報との照合による識別を含む）ができないように加工したもの」(<https://www.nstac.go.jp/services/anonymity.html>) である

# 「社会生活基本調査」調査票A/Bの差異

## <調査票A>

【プリコード方式の調査票の記入例】



## <調査票B>

【アフターコード方式の調査票の記入例】

時刻	おもに何をしていましたか ※15分ごとに おもなもの一つだけ記入してください	同時に何か 他 のことも していましたか ※複数ある場合は 一つだけ記入してください	インターネット の利用	場所				一緒にいた人 (出ているものをすべて記入してください)									
				自宅	学校・職場	その他	1	2	3	4	5	6	7				
0:00	昼食のしたく	雑誌を読む		○													
0:30	昼食を食べる																
1:00	歯磨きをする																
1:30	仕事																
2:00																	
2:30																	
3:00	お茶を飲む																
3:30	仕事																
4:00																	
4:30																	
5:00	洗濯機をセットする																
5:30	3歳の子供を保育園に迎えに行く	犬の散歩をする															
6:00	買い物に行く																
	買い物をする																

世帯員各人に時間区分に従って行動の種類を自由に記入してもらい、それを集計の段階で、あらかじめ定められた分類基準に従って分類コードを与えます。

資料：総務省統計局『平成23年社会生活基本調査 調査票Aと調査票Bの生活時間欄の違いについて』  
<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2011/time/index.html>

# 分析結果①男性：余暇時間の推移

	N	余暇時間 合計	休息型 余暇時間	趣味的 余暇時間	交遊型 余暇時間
1996年	129535	268.32 (185.12)	230.33 (170.71)	2.90 (1.29)	35.09 (101.20)
2006年	79141	337.99 (233.19)	225.84 (175.61)	85.83 (152.39)	26.32 (87.81)
2016年	73586	338.52 (243.06)	231.36 (194.11)	86.82 (160.07)	20.33 (79.86)

注) 数値は平均値 (分)、カッコ内は標準偏差 (分)

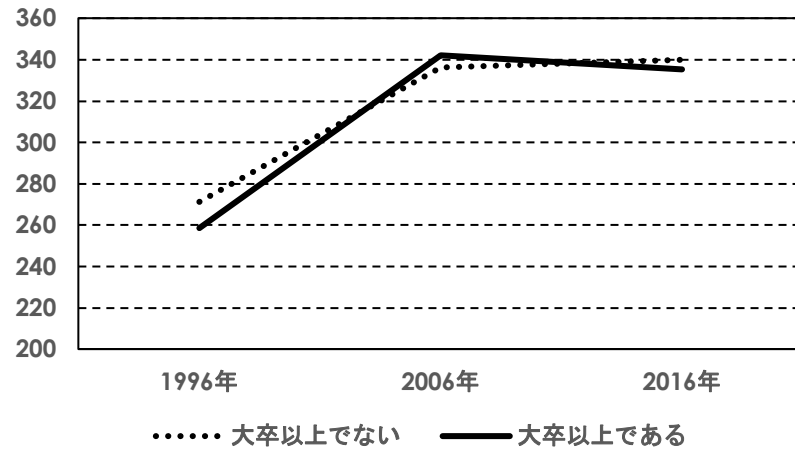
## 分析結果②女性：余暇時間の推移

	N	余暇時間 合計	休息型 余暇時間	趣味的 余暇時間	交遊型 余暇時間
1996年	98184	226.17 (154.20)	190.44 (133.86)	2.82 (1.29)	32.90 (95.66)
2006年	63690	275.44 (179.39)	193.41 (137.65)	54.72 (110.72)	27.30 (84.33)
2016年	64003	272.48 (189.54)	198.01 (153.29)	52.54 (114.15)	21.94 (79.67)

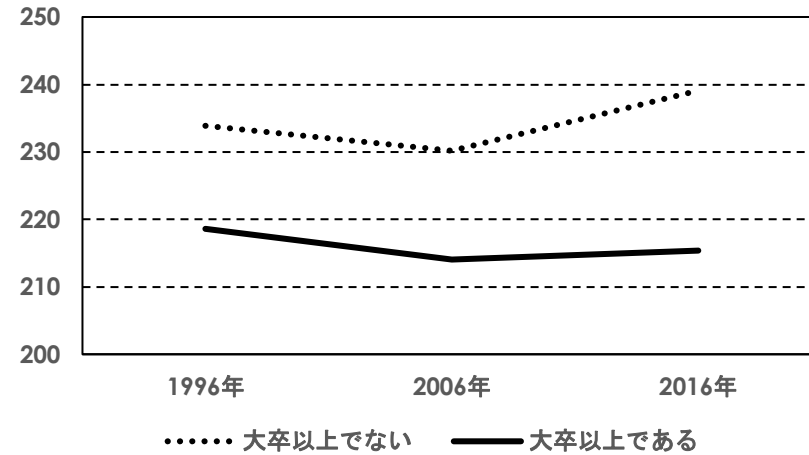
注) 数値は平均値 (分)、カッコ内は標準偏差 (分)

# 分析結果③男性：余暇時間×学歴

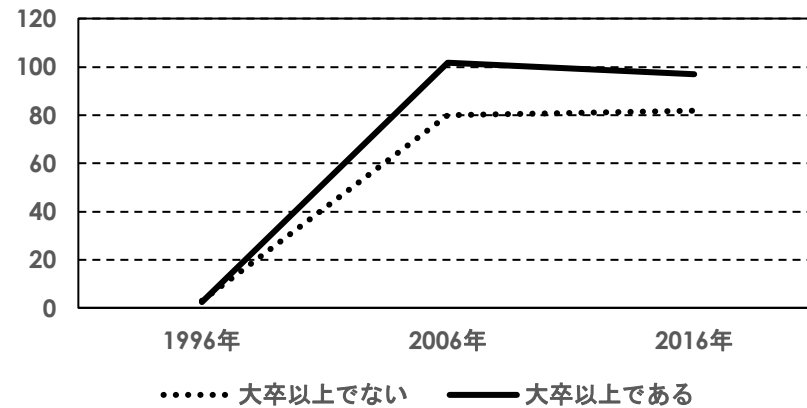
余暇時間全体



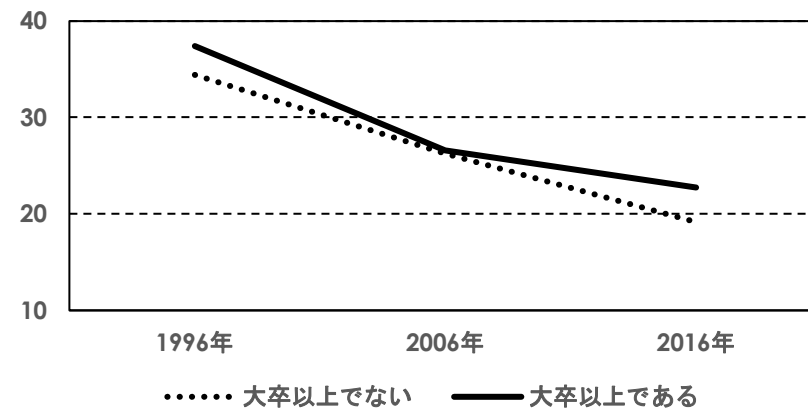
休息型余暇時間



趣味型余暇時間

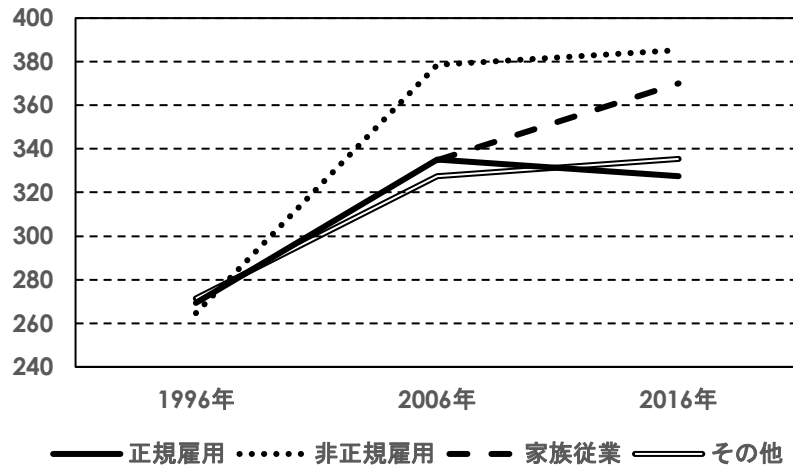


交遊型余暇時間

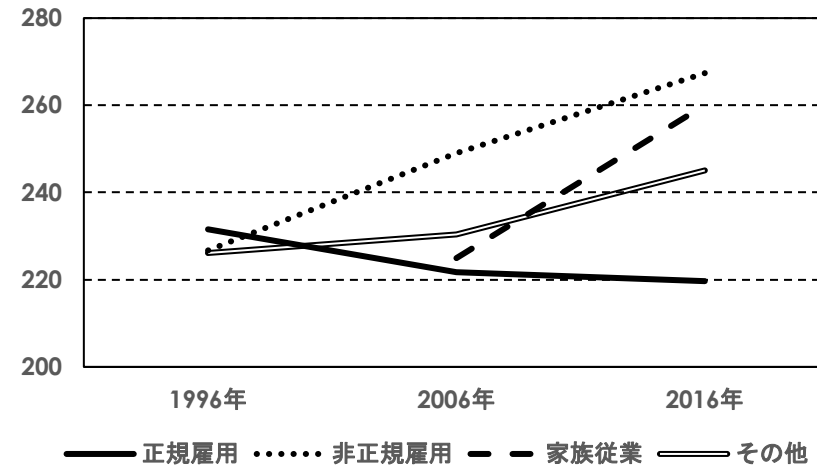


# 分析結果④男性：余暇時間×職業

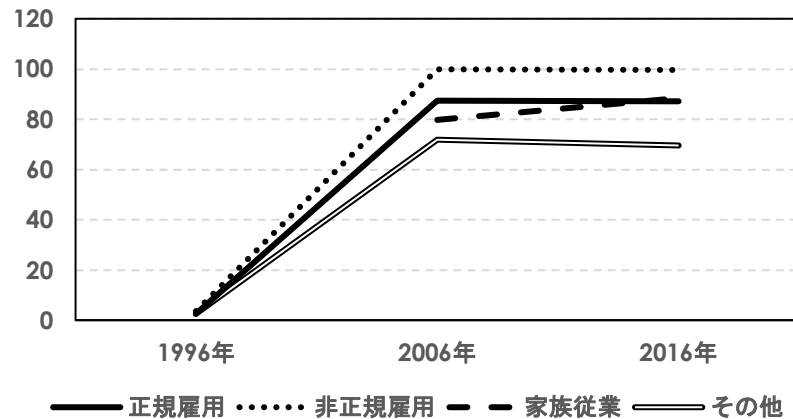
余暇時間全体



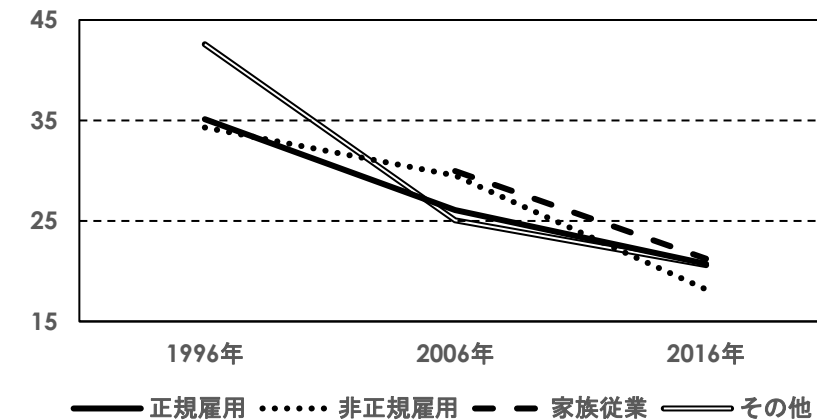
休息型余暇時間



趣味的余暇時間

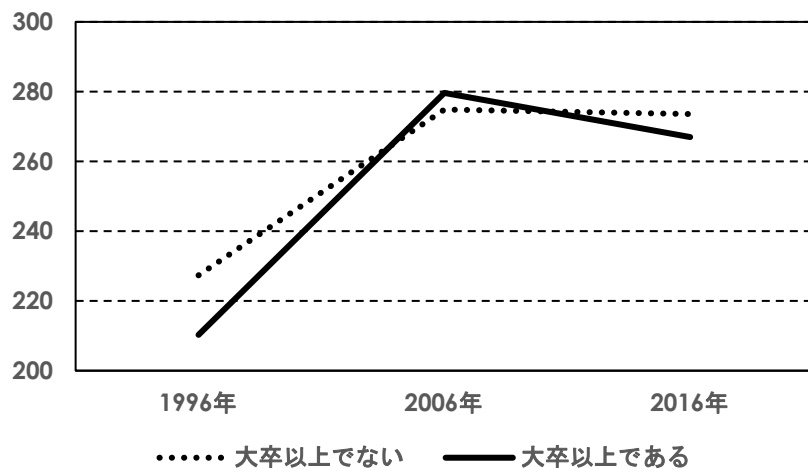


交遊型余暇時間

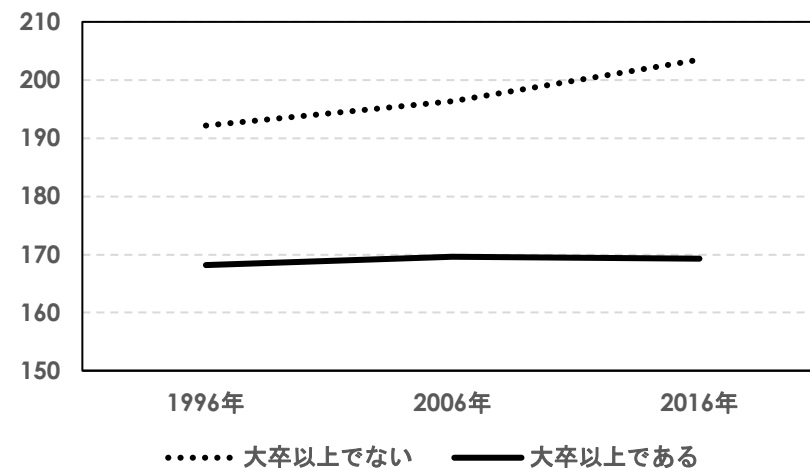


# 分析結果⑤女性：余暇時間×学歴

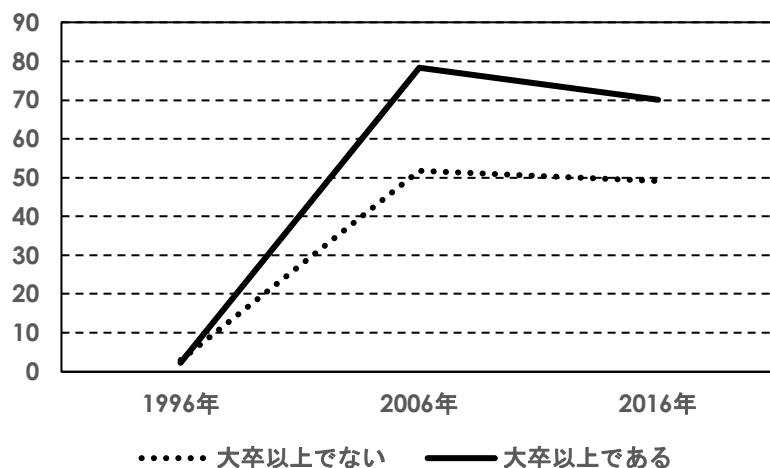
余暇時間全体



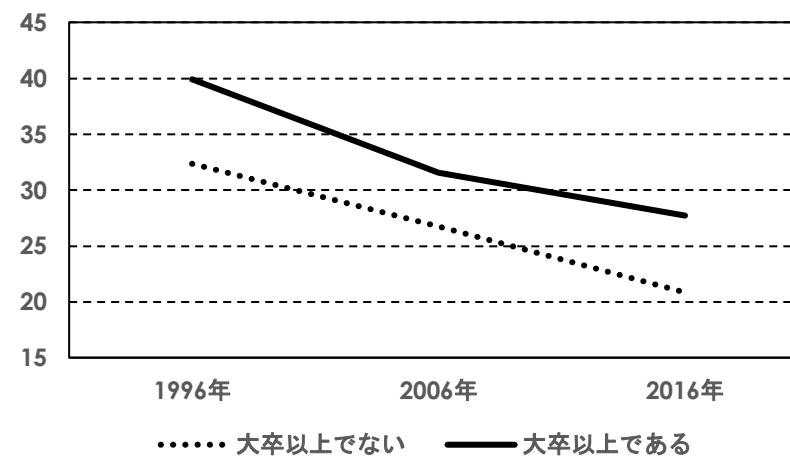
休息型余暇時間



趣味型余暇時間

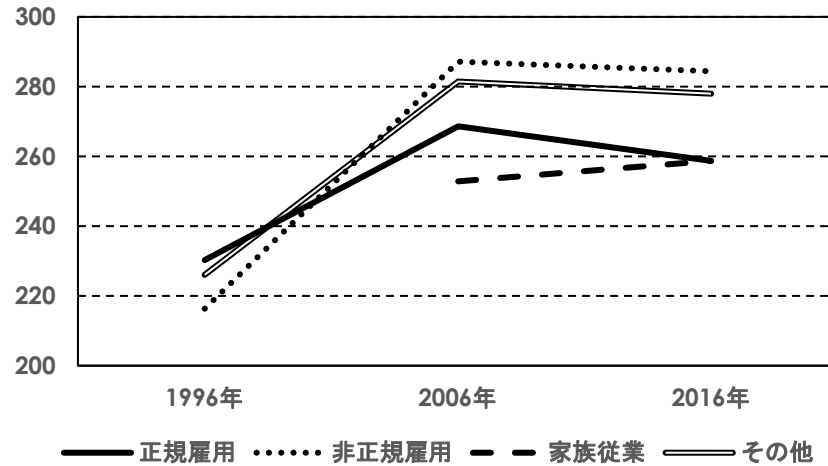


交遊型余暇時間

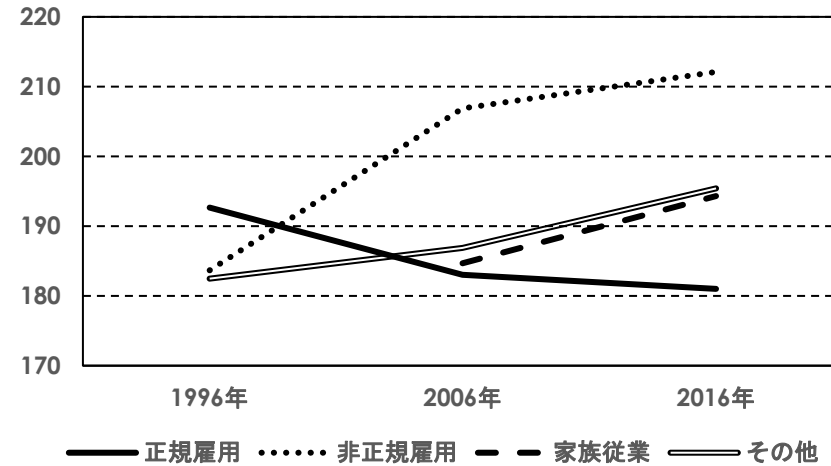


# 分析結果⑥女性：余暇時間×職業

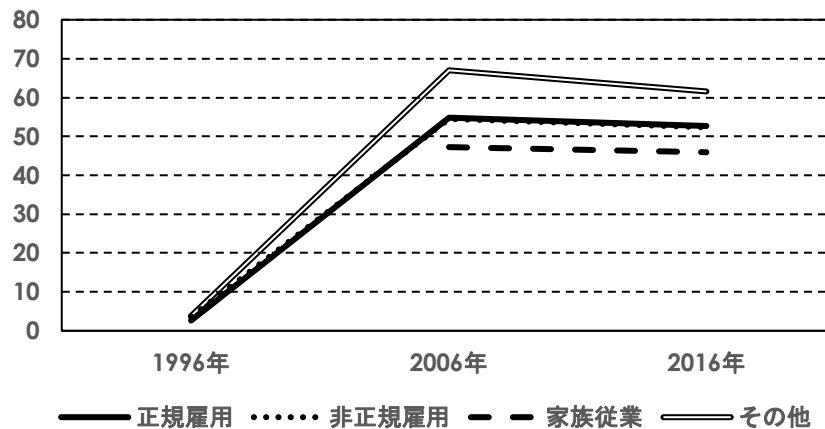
余暇時間全体



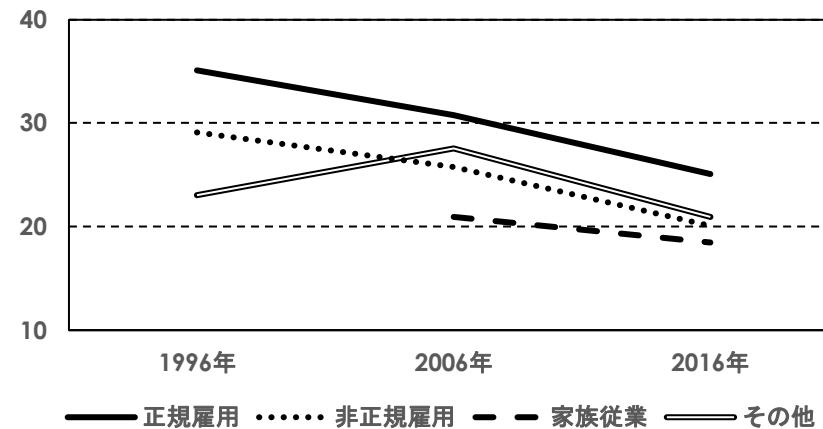
休息型余暇時間



趣味型余暇時間



交遊型余暇時間





# 結論①

## (1) 余暇時間の推移

- ・1996年から2006年の10年間で余暇時間は増加した。交遊型余暇時間が減少した一方で、趣味的余暇時間が増加した。
- ・この傾向は男女ともに同じだが、余暇時間が男性に比べて少ない。この知見（余暇時間のジェンダ―格差）は先行研究と合致する。

## (2) 男性：階層と余暇時間

- ・大卒以上では交遊を、大卒以上ではない層は休息や趣味をより長く実践するが、交遊が減少傾向
- ・休息では正規より非正規雇用が長く、20年間で非正規雇用層の休息時間は増加傾向
- ・趣味は非正規雇用が、交遊は2016年で正規雇用が長いが、交遊時間が階層に関係なく減少傾向
- ・概ね高階層ほど交遊、低階層ほど休息の余暇時間が長いのは先行研究と同様に確認できたが、上記の通り交遊型余暇時間は減少している

## 結論②

### (3) 女性：階層と余暇時間

- ・大卒以上では交遊を、大卒以上ではない層は休息や趣味をより長く実践するが、交遊が減少傾向
- ・休息では正規より非正規雇用が長く、20年間で非正規雇用層の休息時間は増加しているのに対し正規雇用層では減少している
- ・趣味は正規、非正規雇用で大きな違いはない
- ・交遊は非正規雇用よりも正規雇用が長いことが20年間一貫しているが、いずれの階層でも交遊時間は減少している
- ・概ね高階層ほど交遊、低階層ほど休息の余暇時間が長いのは先行研究と同様でこの構図は男性と基本的には同じであるが、女性の方が男性以上に階層による余暇時間への影響が顕著

## 参考文献①

- Aguiar, M. and Hurst, E., 2007, "Measuring Trends in Leisure: The Allocation of Time Over Five Decades", *The Quarterly Journal of Economics*, 122(3): 969–1006.
- Bittman, M. and Wajcman, J. 2000, "The Rush Hour: The Character of Leisure Time and Gender Equity", *Social Forces*, 79(1):165–189.
- 石田賢示、2019、「余暇時間の構造とその階層差 – 平成23年社会生活基本調査を用いた実証分析 –」『社会科学研究』70(1): 73-95.
- 石田賢示・佐藤香、2016、「生活時間からみた「ゆとり」の社会階層間格差」『統計』2016年8月号: 14-19.
- Jarosz, E., 2016, "The Duration and Dynamics of Leisure among the Working Population in Poland: A Time Use Approach," *World Leisure Journal*, 58(1): 44-59.
- Kalenkoski, C. and Karmrick, K,S., 2013, "How does time poverty affect behavior? A look at eating and physical activity", *Applied Economic Perspectives and Policy*, 35(1): 89-105.

## 参考文献②

- Katz-Gerro, T. and Sullivan, O., 2010, "Voracious Cultural Consumption: The Intertwining of Gender and Social Status," *Time & Society*, 19: 193-219.
- 黒田祥子、2012、「日本人の余暇時間—長期的な視点から」『日本労働研究雑誌』625: 32-44.
- Mattingly, M, J. and Bianchi, S. ,2003, "Gender Differences in the Quantity and Quality of Free Time: The US Experience", *Social Forces*, 81(3): 999–1030.
- 水野谷武志、2020、「乳幼児を持つ夫婦及び母子世帯の時間貧困」『統計学』119: 18-32.
- 水落正明、2010、「夫婦の家事・余暇時間に関する分析：「社会生活基本調査」個票を用いて」『三重大学法経論叢』28(1): 1-14.
- Robinson, J. and Godbey, G., 1999, *Time for Life: The Surprising Ways Americans Use Their Time*, Pennsylvania State University Press.
- 佐藤香、2009、「性別役割分業と平日の生活時間」財団法人連合総合生活開発研究所編『生活時間の国際比較—日・米・仏・韓のカップル調査』97-113.
- Vickery, C., 1997, "The time poor: A new look at poverty", *The Journal of Human Resources*, 12(1): 27-48.

# 謝辞・付記

(1) ご清聴ありがとうございました。本日の研究報告は、JSPS科学研究費助成事業基盤研究(C) (22K01913)の一部です。

(2) データの使用については、一橋大学経済研究所へ申請し、独立行政法人統計センターの了承を得ました。本研究報告で示したデータは、統計法に基づいて、独立行政法人統計センターから「社会生活基本調査」(1996/2006/2016年)に関する匿名データの提供を受け、独自に作成・加工した統計です。

(3) 本研究集会の運営・準備等をいただきました先生方・スタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。